様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２０ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５３２９１

研究課題名（和文）ニーズとライフスタイルを踏まえた吃音がある中学・高校生の教育・支援方法の開発

研究課題名（英文）Development of education program tailored for junior and senior high school students who stutter base on their need and lifestyle

研究代表者
小林　宏明（Kobayashi, Hiroaki）

金沢大学・学校教育系・准教授

研究者番号：５０３３４０２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：多様な教育・支援ニーズがあり、勉学や部活動などで多忙な吃音のある中学・高校生の実情にあった教育・支援方法について、(a)「吃音のある中高生のつどい」の実施、(b)「吃音スタディーブック中高生版」の開発をした。「吃音のある中高生のつどい」は勉学や部活動などの影響が最小限となる夜間や休日に、2014年度に6回、2015年度に5回実施し、毎回1～7名の参加があった。「吃音スタディーブック中高生版」は、中高生が興味を持って取り組めるように、タブレット端末などを用いるマルチメディア自学教材とし、吃音の基礎知識クイズ、吃音動画クイズ、吃音の中高生へのメッセージ（吃音との付き合い方の提案）で構成された。

研究成果の概要（英文）：We developed an education program tailored for students who stutter in junior and senior high school that are busy with studies and club activities. The program consisted of two sub-programs: (a) meetings for junior and senior high school students who stutter, and (b) providing stuttering study books to such students. Eleven meetings were held at night, or on holidays, so as not to impose restrictions on the students' regular schedule (6 times in 2014 and 5 times in 2015 school years). One to seven students participated in each meeting. The stuttering study book consisted of multimedia-teaching material running on a tablet computer, which included basic knowledge quizzes about stuttering, a stuttering video quiz, and a message to teenagers that stutter, including suggestions on how to cope with stuttering.

研究分野：特別支援教育

キーワード：吃音　中高生　通級による指導　マルチメディア教材

１．研究開始当初の背景

吃音は、学齢期以降で人口の約 1%を占める、出現頻度の高い言語障害である（Guitar, 2014）。吃音の問題は、言語面の問題（どもってうまく話せない）にとどまらず、心理的な問題（話すことやコミュニケーションに対する不安や自尊感情の低下等）、社会生活面の問題（授業の発表や友人関係構築、進学・就職時の面接試験の困難等）等、吃音がある人の生活に様々な形で困難をもたらすことが指摘されている（小林, 2014）。また、吃音は小学校中学年から中学・高校の時期にかけて、進展（悪化）しやすいことが指摘されており（Guitar, 2014）、吃音がある人の体験談等で「中学・高校生（以下、中高生）の時期が人生の中でもっとも辛い時期だった」と述懐しているものが少なくない（全国言友会連絡協議会, 2002）。

我が国における吃音がある中高生に対する臨床は、公立中学校に設置されている言語障害通級指導教室（ことばの教室）、もしくは言語聴覚士がいる病院等が担当することになっている。しかし、ことばの教室においても、病院においても吃音がある中高生に対する臨床は極めて貧弱であり（小林ら, 2013; 原ら, 2009）、吃音にまつわる様々な問題が深刻化していることが少なくない中高生の実状に合わせた臨床方法の開発・検証はほとんど行われていない。

２．研究の目的

本研究では、上述した現状を鑑み、吃音がある中高生の実状にあった教育・支援方法を模索することとした。

具体的には、吃音がある中高生の実状として、（a）前述したように言語面、心理面、社会生活面等の様々な領域に渡る多様な教育・支援ニーズがある、（b）勉学や部活動等で多忙な生活を送っており、吃音問題改善のために十分な時間と労力を必ずしも十分に割くことが出来ない点を考慮し、（1）授業や部活動などの学校生活への影響が最小限となる夜間や休日に行う「吃音のある中高生のつどい」の実施、（2）ことばの教室等への通所を必要としないマルチメディア自学教材である「吃音スタディーブック中高生版」の開発を行い、双方の利点や問題点等を検証することとした。

３．研究の方法

（1）「吃音のある中高生のつどい」の実施

勉学や部活動などで多忙で、通級指導に通うことが難しい中高生の実情を考慮し、部活動などが終わった夜間（19:00～21:00）や休日・長期休業期間に、2013 年度に 6 回、2014 年度に 5 回の計 11 回を実施した。つどいの募集は、近隣のことばの教室や言語聴覚士のいる病院への案内チラシの配布と筆者の開設するホームページにて行った。つどいのスタッフは、筆者の他、現職通級指導教室教員やセルフヘルプグループに所属する吃音当事者、大学生が担当した。つどいは、アイスブレーキング（30 分程度）、吃音の話し合いや学習（45 分程度）から構成された（表 1）。また、つどい終了後に 30 分程度、保護者と筆者とで懇談を行った。保護者と筆者との懇談の間、参加者はスタッフとして参加している現職通級指導教室教員や吃音当事者、大学生と懇談をして過ごした。

表 1 つどいの概要

回	参加者	アイスブレーキング	吃音の話し合いや学習
2013 年度（6 回）			
1	4 名	自己紹介、同じところ当てゲーム、ジェスチャーゲーム	吃音で困ることと切り抜け方、吃音のカミングアウト
2	5 名	サイレント自己紹介、あなたはどっち など	吃音 Q and A、吃音で困ったこと発表
3	3 名	話し言葉を使わないコミュニケーション	吃音クイズ（吃音スタディーブック）
4	7 名	うきうきクッキング（ピザとプリン作り）	吃音で困ること発表、吃音当事者への質問
5	1 名※	将棋対決	吃音の中高生へのメッセージ（吃音スタディーブック）
6	3 名	他己紹介、好きなメニューは? その 1	吃音当事者の中高生の時の話を聞こう
2014 年度（5 回）			
7	2 名	好きなメニューは? その 2	小林の吃音半生記 1、吃音のある人のための法律を作ろう
8	3 名	好きなメニューは? その 3	小林の吃音半生記 2、吃音当事者への質問
9	3 名	「みんなが○」を探そう	カードトーク
10	1 名※	おしゃべり	すごく！ すごろく
11	6 名	あなたはどっち?、一人の質問を考えよう	新学期の不安と悩み

※ 悪天候のため、キャンセルが相次ぎ 1 名の参加となった。

(2)「吃音スタディーブック中高生版」の開発

国内外の吃音のある子どもや成人向けのホームページや自学教材（ワークブックなど）、吃音以外の障害（発達障害など）のある子ども向けの自学教材を参考に、項目や内容を設定した。作成にあたっては、吃音のある中高生がかかえる多様な問題の一つ一つについて、わかりやすく、かつ楽しく理解と問題解決のための取り組みができるような内容となるようにこころがけた。また、吃音の言語症状や、吃音が出にくい話し方のデモンストレーションなど、音声・映像情報を盛り込んだ。さらに、操作の容易性や中高生の関心を引きつけるために、タブレット端末などを用いて操作できるようにした。

作成した教材は、「吃音のある子どものつどい」で試用し、つどいに参加した子どもから内容や構成などについての意見を求めた。

４．研究成果

(1)「吃音のある中高生のつどい」の実施

① 参加者　中学生男児(2013年度2年生、2014年度3年生）3名が部活動や受験を控えた時期を除いたほぼすべての回に継続して参加した。また、1～3回程度の回にのみ参加した中高生もいた。参加回数が少ない中高生の中には、部活動や受験があったり、遠方（つどい実施場所から300㎞超）に住んでいたりするために、参加したくてもできない人がいた。

② アイスブレーキング　今回実施したつどいは 2～3 月毎に開催され、毎回参加者の入れ替えもあったため、参加者の緊張をほどき、参加者同士の交流を深めるアイスブレーキングの活動は、その後の吃音についての話し合いや学習を円滑に進める上でも不可欠な活動であった。第１回のつどいでは、参加者全員の前での自己紹介を行ったが、参加者の中に、自己紹介に苦手意識を持つ者が少なくなかったことから、第2回以降は、サイレント自己紹介（発話はせずに、名前や学校名、学年などが書かれた紙を見せる）、他己紹介（参加者とペアとなったスタッフに名前や学校名、趣味などを伝え、ペアとなったスタッフが全体に紹介する）など、全体の前で発話しなくてもすむ活動にした。また、ゲームについても、発話へのプレッシャーやストレスを減らすために、ジェスチャーゲームなどの発話を伴わないものや、同じところ探し（ペアの相手との共通点をできるだけ多く見つける）、好きなメニューは?（参加者を 2 チームに分け、チーム対抗で、メニュー表から相手チームの好きなメニューを探り、言い当てる）など少人数で行うものにした。

③ 吃音についての話し合いや学習　(a) 自身の吃音の状態や困難を話す（吃音で困ることと切り抜け方、吃音のカミングアウト、吃音のある人のための法律を作ろう、新学期の不安と悩みなど）、(b) 吃音や基本知識や改善法を学ぶ（吃音 Q and A、吃音クイズ、吃音の中高生へのメッセージなど）、(c) 成人の吃音当事者と関わる（吃音当事者の中高生の時の話を聞こう、小林の吃音半生記、吃音当事者への質問など）、などの活動を行った。(a) では、(1) 事前にワークシートに話す内容をまとめる、(2) 吃音当事者である小林や言友会会員が、発話の口火を切ったり話がゆきづまった時に発言したりするなど、話し合いの調整役を担った。中高生の中には、吃音による話しにくさだけでなく、人前が苦手なことや本心を話すことへのためらいや抵抗から、積極的に発言できない者もいた。しかし、そのような中高生も、ワークシートに書かれたことの具体的な説明の求めに応じたり、吃音当事者や他の中高生の発言に続けて自身の体験や考えを話したりする様子が見られた。(b) では、マルチメディア教材の吃音スタディーブックを活用した。(c) では、スタッフとして参加した成人の吃音当事者に、現在の吃音の状況や、中高生の時の様子、吃音のある中高生へのメッセージなどを話してもらったり、参加者からの質問に答えてもらったりした。参加者は、成人の吃音当事者が、吃音がありながらも、意欲的に仕事に取り組んだり、充実したプライベートを過ごしたりしていることに安心した様子を示していた。また、自身の吃音の悩みを成人の吃音当事者に積極的に相談する姿も見られた。

④ 保護者と懇談中の雑談　活動が終わった安堵感からか、つどいの活動中にあまり発言がなかった中高生からも活発な発言があり、和やかな雰囲気となっていた。

⑤ アンケート　中高生、保護者とも、概ね高い満足度であった。保護者からは、「吃音について話ができる場があるということが、拠りどころ、安心感となり、普段の生活にも良い影響があると思う」などの感想があった。

⑥ まとめ　毎回継続的に参加した中高生がいたこと、アンケートで中高生、保護者双方の満足度が高かったことから、つどいを通した吃音のある中高生への支援には一定の意義と効果があると考えられた。活動をする際には、吃音や発話に対する抵抗を和らげる工夫や、中高生の関心を引く活動や教材の準備を行うとともに、中高生同士の親睦を深める雑談などの時間を確保する必要があると考えられた。

(2)「吃音スタディーブック中高生版」の開発

吃音の基礎知識や吃音の話し方、吃音のある有名人、吃音の捉え方の提案などの内容で構成された「吃音クイズ」と、スピーチセラピーや吃音の心理面への対処、環境調整の紹介、吃音に関するよくある質問とその回答集などの内容で構成された「吃音のある中高生へのメッセージ」の2の教材を作成した（表2）。

作成したスタディーブックは、吃音のある中高生のつどいの吃音についての話し合いや学習を行う際に使用した。スタディーブックを実施している際の参加者の反応やアンケートの回答は概ね良好であった。参加者の中には、吃音の基本的な知識（たとえば、吃音のある人の人口に占める比率など）が不十分だったり、吃音の言語症状の重症度を誤って認識（たとえば、力の入らない軽い繰り返しを力の入った阻止よりも悪化していると捉えるなど）したりする者がいたが、スタディーブックを通して正しい知識を学ぶことができた。

表2　スタディーブックの内容

吃音クイズ	
○×クイズ	吃音の基礎知識（出現率、吃音にまつわる誤った認識、吃音の出やすい場面、発吃時期）
動画クイズ	吃音の話し方（繰り返し、引き伸ばし、阻止）、吃音の重症度と口腔や体の力の入り具合との関係
吃音のある有名人クイズ	吃音のある有名人にまつわるクイズ
○×クイズ Part 2	吃音が悪いことやいけないことではないことについて、吃音の予後、吃音の捉え方の提案
吃音のある中高生へのメッセージ	
吃音への対処法の提案	スピーチセラピー、吃音の心理面への対処、環境調整の紹介、吃音の問題は年齢を経るについて軽くなることが多いことについて、吃音があっても話すことを避けないことが大切なことについて
吃音 Q and A	吃音に関するよくある質問とその回答集

スタディーブックは、今後、筆者のホームページ（吃音ポータルサイト http://www.kitsuon-portal.jp）で公開し、吃音のある中高生が活用できるようにする予定である。

＜引用文献＞

① Guitar, B. (2014) Stuttering. An integrated approach to its nature and treatment. Lippincott Williams & Wiklins.
②小林宏明（2014）学齢期吃音の指導・支援 ICF に基づいたアセスメントプログラム 改訂第2版 学苑社.
③ 全国言友会連絡協議会（2002）どもるあなたに ようこそ言友会 私たちの体験談集. 全国言友会連絡協議会.
④ 小林倫代・久保山茂樹・松村勘由・原田公人・牧野泰美・小田候朗（2013）平成23年度全国難聴・言語障害学級及び通級指導教室実態調査報告書. 国立特別支援教育総合研究所.
⑤ 原由紀・小林宏明・坂田義政・前新直志・餅田亜希子・村瀬忍・安田菜穂（2009）吃音臨床に関する実態調査 －1次調査・2次調査－. 言語聴覚研究, 6, 166-171.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）
① 小林宏明、「吃音」に対する、心理面も含めた理解と学校現場における対応、実践障害児教育、査読無、499、2014年、20-23.

〔学会発表〕（計　3　件）
①小林宏明、小林葉子、ニーズとライフスタイルを踏まえた吃音のある中高生の教育・支援方法の開発 「吃音のある中高生の夜間のつどい」の試み、第52回日本特殊教育学会、2014年9月20日～22日、高知大学朝倉キャンパス（高知県高知市）
② 小林宏明、小林葉子、吃音のある子どものグループ指導プログラム作成の試み（2）「吃音のある子どものつどい」指導経過の分析に基づく検討、第51回日本特殊教育学会、2013年8月30日～9月1日、明星大学日野キャンパス（東京都日野市）
③小林宏明、小林葉子、吃音がある子どものグループ指導プログラム作成の試み(1)「吃音がある子どものつどい」指導経過の分析に基づく検討、第50回日本特殊教育学会、2012年9月27日～28日、つくば国際会議場（茨城県つくば市）

〔図書〕（計　1　件）
① 小林宏明、学齢期吃音の指導・支援 ICF に基づいたアセスメントプログラム 改訂第2版、学苑社2014年、256ページ

〔その他〕
ホームページ等
吃音ポータルサイト
http://www.kitsuon-portal.jp

６．研究組織
(1)研究代表者
小林　宏明（KOBAYASHI, Hiroaki）
金沢大学・学校教育系・准教授
研究者番号：５０３３４０２４